



装束要領抄  
尾

73  
1306  
2



月 7 邊 3  
部 1306  
2



唐朝有紗帽之制是本邦烏帽子也乎和名鈔烏帽兼名莊云帽一名頭衣注烏帽子俗訛烏爲馬今按其著用之始不分明蓋嵯峨朝延弘仁九年有男女衣服皆依唐法之制始于此時平天武朝延有漆紗冠之制充之者非也是正今冠盤觥也并

男官裝束要領鈔下

狩衣之具

烏帽子ウカウシ

持家。清花并中院。三條正親町。三條西小乃家  
おは立烏帽子ウカウシ着用有り。多介羽林家。各家  
諸大夫家より多分十六歳ハチまで立念ほし  
まは折烏帽子オリウカウシと名し。多鷹狩或蹴鞠  
馬上乃耐いつまも風物フウモノの。或抄ウチガサのカサ見  
かくの。又額カサのカサや。或左眉サマシ右眉

装束要領鈔下

あつひの諸眉小諸眉片眉のふりり大抵  
上皇ハ左眉拵家ヲ法眉諸家ナシ家ハ  
小法眉ハ後右眉ナリ地下ハ片眉ナリ  
但家ナレ故実ありて志わて定るるに  
ひりハ志ほうりの名もあつりり  
今世トえて主差別あり

懸緒 付組然

衣冠の部小志ありぬ

布衣 或用狩衣字或又  
用舊衣鴈衣字

布衣 和名紗布  
此問云舊衣  
和語加利岐

或問舊衣始干  
何御宇哉答未  
見國史若弘仁  
以來用之乎據  
野行幸記

宿老袖結事園  
大曆延文四年  
正月廿五日公  
賢公遣經頭卿  
返車曰柳狩衣  
結事組分紺綾  
之外宿老之躰  
不兼及候但就  
狩衣色白組分  
毛用事哉人々

冬ハ裏あり狩衣云之ヲ夏ハ裏ナシ此狩衣ナリ  
但紗のうりさゝハ四季通用して用ひらる又  
右記乃西見凡五位以上ハ織物六位以下ハ文  
定り制ナリ然と云々も今世六位の人も皆  
織物乃狩衣を用るものハ非ナリ文色志わて  
定るるは近年の時ハ紅梅萌黄の浮文盛年  
ハ堅文あり浮文ハ繁ク堅文ハ素ク文と云々  
社給ハ十八未滿毛抜形着る人ハ薄年乃組  
萌黄紅は紫等の打交ニ次紫白濃紫の方へ次

薄衣 裏のすきと次下清美乃組がり裏の表のふ  
 お好 けお名けり持衣の表裏を色各別がり  
 又紗のうらさぬハ縞とむのりひくして前後の  
 すそハむのり次袖結を白糸とよりて  
 おま二筋おへくともとに但夏冬通用乃  
 事右記取んがしめへ通用の持衣とは  
 紗のかりさぬ小裏付とると月ひまふがり凡  
 持衣ハ大納言已下着用のうかり武家よおの  
 てハ徳大吏着用のうかり也公武御制各別持衣

桃華葉持衣  
 大納言と着用  
 すりかり

或問有者持衣  
 以其表裏色織  
 用單狩衣之時  
 其経緯如何答  
 以裏絲為経以  
 表絲為緯于是  
 從緯覆経之理  
 也以松重與藤  
 重知之猶可尋  
 櫻文師

乃くり名けり持衣のりく梅 表白裏蕨芳花山  
 院右大臣忠定公

說正月十五日迄年若人著用之由也一條禪閣兼良公御  
 說自十一月至三月今按号百菊九十月用之互色相通 柳 表白裏青  
 若人浮織物壯年以後人表練貫忠定公說自正月至四月祭日 櫻 忠定  
 著之兼良公御說自冬至春今按四五月号卯花用之亦色相通 櫻 忠定

表白裏二藍兼良公御說表白裏赤花又裏蒲萄春用之 櫻 忠定  
 三條家說表裏白或裏紫号百梅有之此事欵 櫻 忠定

表萌木裏紫春用之中年以後不用此色若年人用之 櫻 忠定  
 忠定公說裏二藍兼良公御說裏赤花各表色一同 櫻 忠定

表薄蕨芳裏濃蕨芳若年人用之中年以後不用之 花山吹 三條  
 忠定公說表薄色裏二藍兼良公御說表蕨芳裏赤花 花山吹 三條

表黃朽葉紅物タテ裏紅老人不用之忠定公說表タテ紅 裏山吹  
 裏黃春用之兼良公御說表薄朽葉裏黃只山吹トモ号之 裏山吹

三條家說表黃朽葉裏青忠定公說表黃 藤 忠定公說表タテ青裏萌  
 裏萌黃若年人春用之兼良公御說表黃裏紅 藤 忠定公說表タテ青裏萌

說表薄紫裏 卯花 四五月份 若鷄冠木 忠定公說表裏共薄青  
 青三四月 色同柳 四月著之諸抄有名無

色 **杜若** 忠定公説表二藍裏萌木四五片著  
之或書表萌木裏薄紅梅有之如何

**盧橘** 忠定公説表タテ黄  
裏薄四五片兼良公

御説表朽葉 **菖蒲** 忠定公説表青裏  
濃紅梅四五片著之 **棟** 忠定公説表薄色裏青  
四五片著之 諸説同之 **女郎花**

忠定公説表タテ黄 **瞿麥** 忠定公説表薄紫裏青兼良公  
御説表紅梅裏青四五片著之 **桔梗** 忠定

表二藍裏青 **萩** 同説表薄紫裏青自六月至八月  
九月兼良公御説表表蕪芳裏青 **紫苑** 忠定公説  
五六片著之 表薄色裏

青自六月至 **黄紅葉** 同説表黄裏蕪芳  
九月諸説同 自九月至五節著之 **青紅葉** 同説表萌木  
裏黄自九月

至五節兼良公御 **白菊** 九十月  
御説表青裏朽葉 色同梅 **黄菊** 忠定公説表黄裏  
同説表蕪芳裏青 移菊 忠定公説表薄紫裏青兼良公  
自九月至五節 御説表中紫裏青自十月至五節 **松重**

三條家説表萌木裏紫忠定公説表青裏赤花四季 **海松色** 忠定  
通用年少人至十五歲著之兼良公御説表青裏紫

表色青黑而如海松裏白八宿老 **凡此等のえと著用乃**

人著之兼良公御説表萌木裏青

時者これくの文と用り事通法乃り

**枯色** 又号黄青忠定公説表黄青自十月至翌  
年三月兼良公御説号枯色表白裏薄色 **薄**

**青** 忠定公説表裏同中年以後用 **二藍** 表裏  
白裏兼良公御説經白緯青 同色 **薄色** 忠定公説  
者不謂夏冬必 **朽葉** 忠定公説表タテ黄裏黄今按  
可用生裏也 青朽葉黄朽葉赤朽葉色々アリ **檜皮** 三條家  
同或裏花田忠定公説表紫裏同老人ハ用 **香** 三條家説四季通用十  
白裏兼良公御説表蕪芳黒アリ裏花田 五以前人不用之若年

人ハコカレ香ト号シテ下カキヲ薄紅ニシテ黄ヲミセテ染之所詮  
濃香也織物ニテ著スル時ハ經緯トモニ濃香ニ染テ織之裏紅老人ハ

經香緯白糸仍文白ナリ浮織物浮線綾長年 **花田** 表裏同老人  
人不用之唐綾并薄物練薄物用也老者白裏

**赤色** 三條家説若年壯年人等用之四季通用忠定公説  
表赤裏二藍年少人著之兼良公御説表タテ紫 **比金青**

忠定公説タテ黒青又キ黄或説 **裏濃蕪芳** 三條家説表薄蕪  
タテ黄又キ黒青云是定説云云

表似梓櫻四季通

用

表似梓櫻四季通

用

用

用 白色

三條家説若年人ハ浮織物浮線綾練薄物等也中年以後唐綾和綾頭丈紗ノ薄物用之 練緯用之 裏若年張

裏中年以後生 け等の敷其文不定各表裏又目乃事

家く縁く意巧區くかして一撮よのへじ

從古記の不見色目さへくけりといふ略之

又白裏乃のりさぬいけり一は雖衰老人憚之

形穢おぬ人の月ひくさ死やうに思ふこと

と近世此年の人も官にまゐりて着用し給ふ

先又布のりさぬハ 上皇極熱の比著薄下

さす依入依附と用れりけり

と人の着用するなり或記よんくけり  
志くハ自身も着用志くこと事ぬや

腰帶 コシオビ 或云宛腰

狩衣の久に浴く、き切と用也但白裏の袴衣  
悉用乃人の白帯と用る恒例なりけり

衣。單并大帷

晴の時の衣并單等と著し尋常ハ大帷白用之  
袴衣乃衣と直衣けりハ衣冠乃時よか

但五月九月仕年の人生衣裏表生 ヒツクリカサキ 檢重と用也

(拾遺) 赤木集  
夏衣光俊朝臣  
世とやすし民乃  
こつひひかろ  
足てむのりさぬ  
ハきく人もあり

皆多しつと月ひくると多分女郎は花蕚芳ふ也  
老人は白衣本將装束抄或抄了る又草帷紅帷衣冠  
乃は同一を代夏は多く単に帷計月ひら  
袖單にしく着用乃も也又尋常ハ草帷と  
略して月らさるるなり

指貫

色目衣冠の部小く

下袴 付腰次

衣冠の部了る志あり也

少刀 手サカタ

武家小かわてハ供奉乃時狩衣着用はり  
路途の間或鞘巻或帯れ刀に少刀と月ひ  
也殿中出仕了ハ少刀の月ひたまり  
承るは怪し雨見あり公家にはかりをぬぬ  
是を月ひ結しは但從者ハ太刀とりはら  
又晴の御幸乃時儀府の人帯エ先例なり

蝙蝠

衣冠乃部ぬ志ありぬ

狩衣帶劔例保  
延五年二月十  
日兩院雪見御  
幸衛府之人皆  
帯劔見劔抄頭

淺沓 并緒太

衣冠乃初み志引也

一 栲家。清花并。中院。三條正親町。三條西等の家  
羽林家名家の勝劣差別いふは

栲家とは近衛九條二條一條鷹司れ五家  
なり藤原良房公忠仁公人臣攝政の盃觴  
は同基經公昭宣公是也 是用白乃寂社なり

實長良男  
基經 從一位  
良房 攝政關白大臣  
長良 權中納言從五位  
冬嗣 權中納言從五位  
實長良男

清花 如字華族  
通稱也。北史  
袁翻傳以名家  
子歷任清華

師輔 公季  
鎌足公世  
從一位正位  
太政大臣從位

公實 權中納言從位

實行 三條祖  
太政大臣從位

通季 西園寺祖  
權中納言從位

實能 德大寺祖  
左大臣將從二位

まゝよりいふ栲政用白にまゝいふまゝと  
先途よりいふ也を大臣の太將兼任いふと  
いふ栲政用白のてハ親摸とくはら也故不  
号攝家由也具乎親勇  
從一位正位  
太政大臣從位頭房袁展從位  
太政大臣從位雅實久我祖久我祖  
清花也は久我三條轉法輪西園寺德大寺花山院  
犬吹御門今出川又号  
菊亭等の敷也近世廣幡醍醐  
等之家此列云皇子  
皇孫といふ親王乃 宣下なく源姓を賜て  
大臣の太將ののわり或ハ栲家の清良といへ  
とも栲政用白乃先途もいふ大臣れ太將

師實 權中納言從位  
從一位  
家忠 花山祖  
經實 大炊祖  
号從

栲政用白



久我相國雅實公世  
内大臣正二位  
通親

大政大臣位  
遍光 我正統

大進正位  
通方 今中院祖

實行公孫  
左大臣正位  
實房

公改大臣位  
公房 三條正統

權大納言正位  
公氏 三條親祖

公氏卿八世  
内大臣從一位  
實繼 三條親正統

良皇正位  
公豊 三條親正統

權大納言從位  
公時 三條西祖

乃其のほり多ふ家く也英雄の家なれハ  
稱美のりて清花と稱い又公達家ととも  
花族とも稱也

中院三條正親町三條西此三家ハ次身昇進  
志ふひく大臣に任し給ふとて大將  
兼任し多ふハ故に俗号大臣家此ハ  
法家とて邂逅ハ大臣拜任乃例の如く  
のりとも通例にあつれと大臣家と  
稱せりなり

(名家)漢司馬遷  
傳名家師古注  
名家者流出於  
禮官

羽林家とは侍夜より左右近衛中少將と經歷  
して次身昇進し給ふ家くと羽林家と稱い  
を清府の唐名と羽林と稱也蓋羽林家ハ  
中には勝方ありて或以大中納言為先途或  
以參議散三位先途とて多ふ家く有之禮中  
中御門<sup>号松木</sup>四<sup>是也</sup>過中山等の家ハ是羽林家の  
実とて又三條水無瀬兩流を昇進羽林家  
乃其

名家とは儒門といふ其中左右辨官 有大  
中少

藏人と經歷して次第昇進する家も有り  
諸名家も亦辨官藏人を経て昇進乃  
家も有りといふは流儀各別なり

一立烏帽子と風折と各別は小町の端  
一立烏帽子と風折と各別は小町の端  
一立烏帽子と風折と各別は小町の端  
かついごとく事いふは

續世継云ひいふは  
まもあつけるがえは  
えはういふは

引立烏帽子保  
元物語係殿御  
轉義朝御前ニ  
召ル赤地錦直  
垂折烏帽子引  
立ワイタテ註  
太刀ハイタリ

かろりてゆめまとも又かあそほ  
引立えわういふありさわういふ  
あそはるへい志うは小町のうたひも  
いふまや近世烏帽子あそわういふ  
各別小なりいふとおほえ作

一布衣とまて和訓うりさぬとよき  
官位有定人の着用はかりさぬといひ  
いふ布衣といふやうに承い各差別有定  
是は假令上下をわらうとあんと覚作

百練抄保元三、  
年三月近白藏  
人五位等連署  
訴申有文狩衣  
停止由仍被許  
之

狩衣といひても布衣といひても裁縫  
いさかかろりろりろりい 院中御衣  
布衣始とり事有之是ハ 御讓位の位  
上皇よりわく御狩衣著御乃款式と  
志くハ時小より布衣といひてもかりさぬ  
といひても色々形々次ハ又青侍乃  
着しハ大祥之文とていとも希有に  
とねおるいいしハ五位の人ハ地下ハ文  
の定さへりりり世も地況青侍と云

色ろろろろろり取らぬ

一狩衣と著しして系内出仕事もい  
堂上方衣冠束衣より下の服と著し  
内出仕の事乃ち之い但清幸之時供奉之  
堂上方狩衣着用しつとていとも出仕之儀  
之い又諸家乃侍雑色布衣と著し去人  
ハ相従ひ系入する庭上すとの儀中ノ  
子細ハ但不入日見禁秘御針華月華等門之由と制あり  
一頭職といはる

中右記寛治八  
年閏三月八日  
近曾有新制布  
衣烏帽子者不  
可入陣中

さしつら目くらた官と頭職も殿官  
せきりひかり

直垂之具

烏帽子

大概風折の

懸緒 并組紐

糸

直垂 并 布直垂

堂上ハ練精好等乃直垂なり武家方侍從心

とかくれゝ死のうゝ也ま色大概黒紅後

木蘭地といふ多れ由なり其外色くあり

直垂武士服之  
由見或秘記蓋  
其並縹不分明  
可考

木蘭地僧尼今  
義解謂木蘭黃  
様也

支那要領抄下

紫萌黃紅等直  
 垂於武門御制  
 服之由以是雖  
 狩衣憚此三色  
 之由也蓋近世  
 紅之外多被用  
 之云

但紫萌黃紅等ハ 將軍家清代、清着用乃  
 色なりく憚之云然其陽明の清家ハ、精好の  
 紅乃直垂は着用の云なり又布直垂は武家  
 五位法衣、持家清毒の諸大丈或ハ地下の法衣  
 官人事により着用と扱云て直垂ハ藝乃時  
 乃キ也布直垂俗小皂と大紋といふ大なり  
 紋付よりゆへや素襖袴との習りぬハ胸紐  
 打紐と革緒との違なり

同下シモ

下ハ総フチのり糸長縮あり長縮古薄縮糸後世用衣服名色上ホ下ホ但  
 腰紐ハ白練あり縮直垂布直垂とも小裁縫習り  
 事なりコシホひホハ先大口と考ホ一ホ次ホかホひホと  
 むホこれホかホさホてホ着ホ一ホさホうホ毎ホにホ直垂ホ下  
 と着ホ一ホさホうホ一ホ伊勢下総入道俗名下総守貞頼 宗五書ホかホ尺ホと  
 一ホり

少刀

堂上ホハ直垂に少刀の事あり但陽明の清家  
 ハハ代ホの清例ホとホて少刀と月ホひホ多ホふホ子ホ細

いづれなり武家よ供奉之時少刀に鞘巻  
兼<sup>タイ</sup>きん殿中出仕しは少刀のし月ひく由也  
いづれ白太刀黒太刀なりしは太刀兼<sup>タイ</sup>口  
例粗武家乃記よるをほそまて

蝙蝠

前小お

浅履 并緒太

おに同

一陽明の清家といつまの清家とすは武又  
揚名れ女おし事と同一事なり

近侍殿乃清家とすはひり大内裏の時ハ  
を弟殿清家陽明門の前よりたりたる  
陽明の清家とすはひりなり  
くりき事いふは又揚名の女おし  
事ハ別儀中く秘傳家にからぬ事なり

一陽明乃清家計よ少刀被用は子細有るや  
ひり尊氏將軍に代て清在京乃同

或曰萬松院殿  
義晴御時惠雲  
公種家被進  
院殿紅直無少刀之  
例也云

近湯殿（紅直無少刀被進）ひびりし例  
として用ひ給ふなりなりあふら子細  
なり事よてし

一藪とひい

藪とは急度晴しとひり次又平生乃事  
ぬきひり中なる事よてし晴藪尋常  
と三つは受りしりりり作

一白太刀黒太刀と事い

白太刀と、銀にくり銀乃打敷めて目貫

おと或ハ家の文とほき帯執草蒲葎を  
表向、義に用へさうなり黒太刀と  
鞠ゆりか〜ほふ較とけく黒くわり  
かおと志や〜どうよてけりあはりおこ  
〜〜目貫我家の紋と焼付に〜帯執  
草蒲皮柄もす〜びうてゆれ〜ど是と黒  
太刀と〜〜伊勢下総入乃志〜  
〜書み〜

召具裝束

褐衣 布衣  
白張

武官乃五位五位殿上人行幸の前駈或ハ節會ハ

警固の日ハ闕腋袍と着

行幸之時帶弓箭卷纓  
ワリ節會之時立安每

也 纓 綾オモクして隨身と召具オモクして隨身裝束ハ

冠 細綾 褐衣 右近衛方或熊丸或鴛鴦丸等也 袴 左近

或藤芳或二藍右近衛  
方或朽葉或崩木等也 帶弓箭 壺胡錄 帯釵オモクとせオモクび

右中將の隨身オモク人左右少將乃隨身二人左右侍オモク佐の

隨身二人是定例なりオモク外尋常之儀オモクは隨身

の布衣乃青侍白張の雜人召具オモクなり



隨身器具一冷入河之於布衣白法具一トテ  
事勿論なり

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

衣文雜色可覺悟條々

- 一 御主人汚裝束汚着用乃事一ツツ五三日已前に  
皆具損失之有無可改之<sup>事</sup>
- 一 御懸緒別小月<sup>意</sup>一 并汚位袍母同一又乃系  
且又針<sup>と</sup>こ<sup>を</sup>子<sup>等</sup>可用意<sup>事</sup>
- 一 御裝束汚着用又ハ汚脱<sup>ス</sup>之時汚主人と不向北<sup>極</sup>不  
可知方<sup>角</sup><sup>事</sup>
- 一 御冠并汚裝束不向<sup>北</sup>方不汚跡<sup>方</sup><sup>事</sup>
- 一 武家之汚方束帶衣冠汚着用之時<sup>カ</sup>カ<sup>ハ</sup>以袖<sup>と</sup>

さらしてまじくしるし公家ゆくと評所作多し  
御人此心得ある事なり

五位五位装束之具并同言之類 家從壺井  
義知  
書之類と添削とありぬ尤有無もの也  
減り此色に染へる人乃兼内と道は多  
少とありん

元禄十二年三月十日より皇太后の御裁断御判

養老要令鈔

廿七

